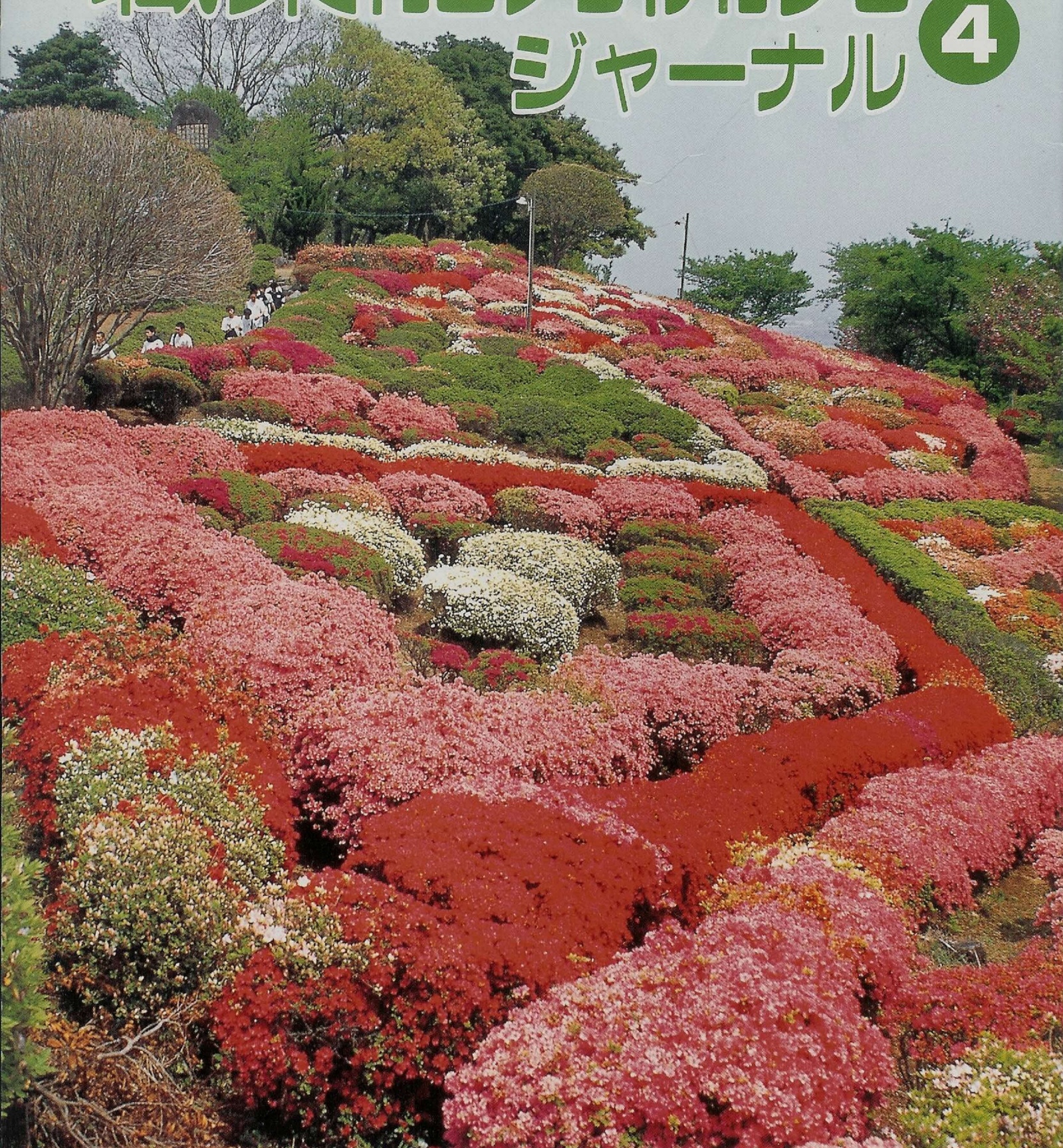


# 職業能力開発 ジャーナル

Vol. 49  
No. 4  
2007年

4



# ブータンにおける職業教育

雇用・能力開発機構千葉センター 機械系講師

久米 篤憲

## 一 はじめに

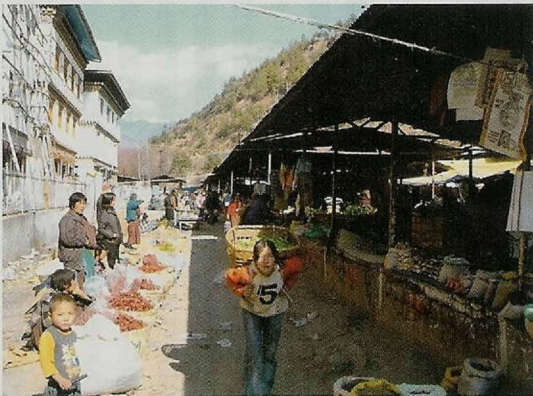
平成一八年一月一日から二月二五日まで、国際協力機構（JICA）より、短期派遣専門家としてブータン労働人材省に派遣されました。派遣の目的は、同省人材局が運営する職業訓練校の運営状況や指導の実態を調査し、主に指導員に対する指導技術の向上に関する支援のあり方を提案することでした。

## 二 ブータンとは

ブータンの国土は九州の一・一倍の広さで、北は中国、南はインドという大国にはさまれた内陸国です。人口は、僅か約七五万二七〇〇人（二〇〇四年、ブータン政府資料）で、私が暮らす千葉市の人口約九〇万人よりも少ない、小さな仏教王国です。

また、日本という国、そしてJICAという団体名称が、一般国民にまで広く浸透していることに驚きます。その理由は、一九六四年から一九九二年の二八年間、JICAの農業専門家として派遣さ

れた西岡京治氏の功績が大きく、野菜を食べる習慣のなかった国にもかかわらず今では多くの野菜や果物が普及し、中には輸出できる農産物もあります。西岡氏は一九八〇年に国王からタシヨ（貴族・政府高官などに贈られる爵位）の称号を与えられ、一九九二年に逝去された時には国葬まで執り行われたほどで、今でも「ブータン農業の父」と呼ばれています。



毎週金曜日から日曜日、首都ティンブーに立つ市場で多くの野菜類が売られる

ます。

もちろん、その後のJICA派遣による専門家、青年海外協力隊員などの活躍もあって、今日のきわめて友好的な二国間関係が築かれているのです。

## 三 ブータンにおける経済発展の課題

農業従事者が八割を超えるブータンは、製造業などの育成がきわめて遅れています。本来、農業そのものは個人農家がほとんどで、人を雇用するとか経営といった経験も乏しく、製造業育成への転換を難しくしているようです。

また、山岳地域という地理的条件では農地面積も限られている上に、農産物や生活物資を輸送するための道路網整備も大きく遅れ、農林業以外の産業育成を阻害しています。

ふだん私たちが用いる「職業訓練のニーズ」という言葉からは「地域の産業界や企業が必要とする技術や技能を所有する人材を育成して供給する」というイメージが浮かび上がるのですが、ブータン

の場合「雇用してくれる民間企業が育っていない」というのが現状です。「人材の需要と供給」という視点での訓練ニーズよりも、「増加する若年層の雇用機会拡大」という社会現象の対策が大きな課題であり、訓練ニーズなのです。

## 四 職業訓練のニーズ

ブータンの教育は、就学前教育（一年間）から六年生までの初等教育と、七、八学年の前期中等教育、九、一〇学年の中期中等教育、一一、一二学年の後期中等教育、その後の大学などの高等教育で構成されています。

二〇〇六年度の一〇学年の生徒数は七〇三二名で、そのうちの六三三八名が中期中等教育終了試験に合格し、五五五名が不合格、一三九名は受験していません。その内訳を二四ページの図1に示します。

合格した六三三八名の中から二七六四名が公立高校受験資格を取得し、その他の三五三二名は公立高校以外の私立高校や職業訓練に進学、その他は就職することになります。

現在、人材局参加の訓練施設は七ヶ所が運営されており、年間約一四〇〇名の中等教育修了者を訓練することが可能です。

今のところ高校進学と職業訓練受講者が全体の五九・二％という高い割合を示していますが、二〇一二年には一〇学年の生徒数が二〇〇六年の約二倍に膨らむことが分かっています。そこで、二〇〇二年七月から始まったブータン政府の第

## 五 ブータンにおける 職業訓練の実態

九次五カ年計画（中期国家開発計画）には、「職業教育における制度的枠組みの強化」や「職業教育の拡大および組織能力の改善」などが盛り込まれており、具体的には、二〇〇七年七月から始まる第一〇次五カ年計画では、現在八ヶ所の職業訓練施設を二〇ヶ所まで拡大する計画が示されています。

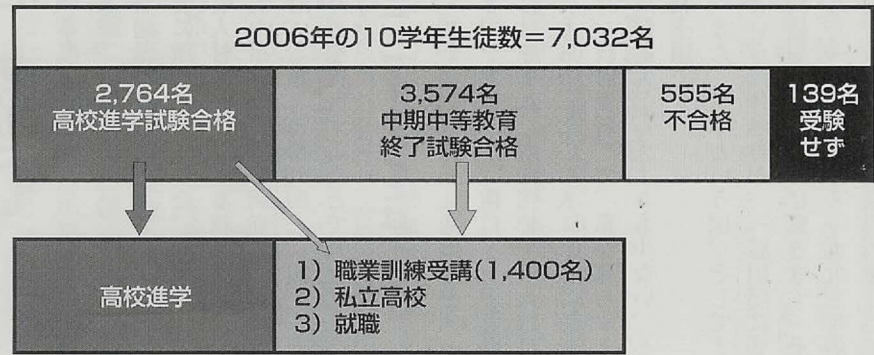


図1 訓練受講対象者

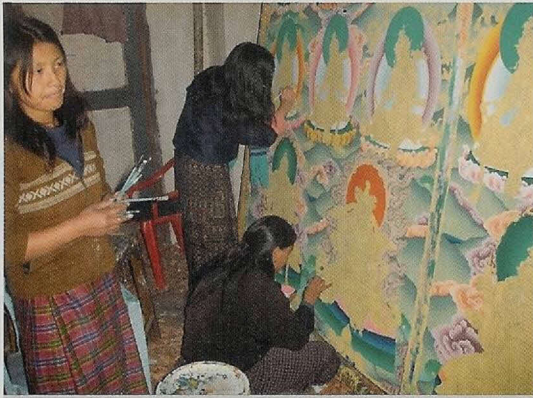
### (1) 伝統手工芸学院

人材局が運営する訓練センターは現在七ヶ所です。そのうちの二ヶ所は伝統手工芸学院と呼ばれる施設で、仏教絵画や木工製品、版画や人形などの手工芸品、織物などの訓練が行われています。

この二ヶ所のセンターは伝統工芸の後継者育成という目的に加えて、文化財保護の重要性を強く感じました。

ブータンではお寺の他に、一般の住宅でさえ外壁や内壁には様々な仏教画が描かれています。この仏教様式の文化や伝統を継承していくのが、この訓練施設の訓練ニーズなのでしょう。訓練生たちが教材として実際に製作したものは販売されることもあります。

また、訓練コースが四年から六年と長期間に及ぶことで、終了時にはかなりのスキルを習得しています。



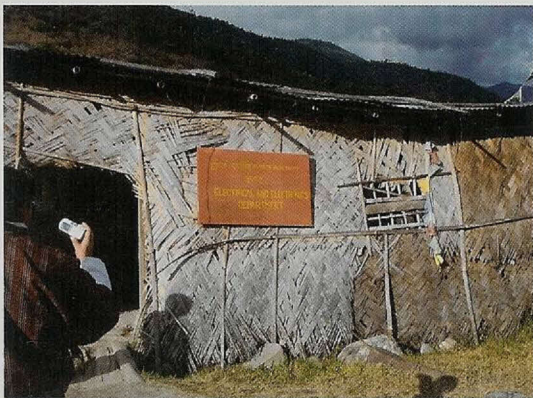
6年間の絵画訓練コース訓練生による実習風景

これらのことから、設備投資が容易なこともあって訓練終了と同時に起業する者も多いと聞きました。

この二ヶ所の訓練施設に関しては、比較的順調な運営がなされていると感じました。

今後の課題は、手工具だけの技能では技能習得に時間がかかりすぎるので、簡単な機械を訓練に導入することでその問題を解消することにあります。例えばボール盤による穴あけや木工用ジグソー（縦型鋸盤）を訓練に導入すれば、これまで鉋や鑿（のみ）で課題製作に多くの時間を費やしていたところを、かなりの訓練時間の短縮が可能となります。しかし、このような「改善」と「伝統技能の継承」の調和が何より重視されているのです。

### (2) 職業訓練校の現状



ランジュン訓練校の電気・電子訓練科の仮設実習場



ランジュン訓練校の新校舎（右奥が学生寮、手前が実習棟）

ブータンの職業訓練はドンボスコという団体が開始し、そこに一九九〇年にドイツ政府からの援助で機材供与などが始まり「王立技術専門学校」として再開し、二〇〇三年に人材局が設立されるまで続きました。

人材局が運営する一般の職業訓練施設は五ヶ所です。実際に運営されている施設も最初に開設されたものが二〇〇一年で、その後、二〇〇三年に三施設、二〇〇六年に一施設、二〇〇七年開校を目標として一施設が準備中です。まさしく職業訓練の歴史は始まったばかりといえるでしょう。

現在の訓練を実施している五ヶ所の施設を視察して驚いたことは、設備や機材の不足です。中には被災地の難民キャンプのような施設が二ヶ所ありますが、二〇〇三年からアジア開発銀行の援助で訓練施設建設が着々と進んでいました。

### (3) 職業訓練が直面している課題

#### ① 訓練機材不足

現在五施設で整備されている訓練機材は、一九九〇年にドイツ政府から供与されたものを、これらの訓練校で分配して利用している状況なので、問題は深刻です。

#### ② 指導員の資質が低い

下の写真は首都ティンブーにある建設訓練センターの溶接実習場の様子です。二名の訓練生が作業中ですが、テント屋根の下に老朽化したアーク溶接機や機材が散乱しています。作業スペースや通路の確保もなされておらず、無秩序で不安全な訓練環境は指導員の資質を表しています。

決して指導員を責めているわけではありません。二〇〇三年から始まったばかりの職業訓練の歴史では、ほとんどの指導員が経験不足なのです。ちなみに私が所属する千葉センターを定年退職された先輩に、私の生年月日と同じ日に指導員に採用された方がいます。私たちは、このような先輩方の背中を見ながら育ってきました。職業訓練指導員に求められる能力や資質は、専門分野における専門的技術量を有し、その専門分野で指導する技術者を有し、受講者の意欲を向上させ激励する姿勢や態度が取れることです。プータンの指導員にもっとも必要なのは、この「専門性・指導技術・望ましい態度」の三点を見せられる優秀な訓練指導員の存在



建設訓練センターの溶接実習場(機材不足よりも整理・整頓の指導が気になる)

在だと思われれます。

#### ③ カリキュラムと教材の未整備

人材局にはSTRD (Skills Training Recourse Division) と、この部署が設けられ、カリキュラムや教材を整備しつつありますが、前記の訓練環境や指導員の資質では「絵に描いた餅」に過ぎません。

#### 六 プータンにおける今後の職業訓練運営

あくまでも個人的な見解として、プータンにおける職業訓練のあり方を模索してみます。すでに述べましたが、この国で職業訓練の発展を阻害する要素は、国に産業が育っていないので雇用主がきわめて少ないことです。したがって、職業訓練で優秀な実践的技術者や技能者を育成しても、彼らの雇用が保障されていません。これまでは国営の電力会社や電話会

社が訓練修了者のほとんどを雇用していますが、数年後にはそれも期待できません。

これからの職業訓練は従来の形態を破る必要があります。実現の可能性は無視して書きますが、JICAが定年したばかりの団塊世代の人材をシニアボランティアとしてプータンに派遣し、モデル工場を創業します。その工場では各種生活必需品や農機具、建設機具などを開発、生産します。当初は日本政府などが支援する橋梁建設プロジェクトなどの機材や消耗品を作成することで、顧客確保が必要でしょう。

この工場の従業員は職業訓練校の指導員や訓練生たちです。訓練は二年間で、一年目は金属加工や電気などの基礎を徹底して指導します。ここでは日本の職業訓練指導員経験者がシニアボランティアとして派遣されると、指導技術や教材作成でお手本を示すことができます。二年目には日本人シニアボランティアと指導員や訓練生たちが製品加工に集中します。ここが、モノづくり達人たちの背中を見せる場面です。二年間の訓練が終了するとほとんどの訓練生が就職するのですが、希望者には三年目の訓練を準備します。いわゆる企業化育成コースで見積もりや経理事務、設計などを訓練し、小規模融資制度を利用して起業を支援します。ここでは日本流「のれん分け」を取り入れ、顧客や下請け作業を提供し、企業経営を支援します。

開発された製品は図面化すると同時にカリキュラム編成し、訓練指導案や作業



クルタン訓練校の訓練生たちと記念の一枚(左端が筆者)

手順書などの教材として整備されます。この一連の作業は、優秀な訓練生を指導員として育成するために四年目の訓練として組み込みます。結果、二年間は日本人技術者の背中を見ながらモノづくりを習得し、三年目には起業ノウハウを、四年目には指導員の実務を経験した人材群が養成されるのです。

二〇〇七年七月から始まる第一〇次五年開発計画では、訓練センターが現在の二倍も増設される予定です。機材不足、指導員不足をこの短期間でどのように解決するのか、大きな課題が山積しています。私のビジョン構想は夢物語のようですが、JICAの五カ年プロジェクトでたくさん訓練生を指導する中から、合計一〇〇名の起業家や指導員を育てることができれば、人口七五万人のプータンの一〇年後には大きな成果をもたらすことでしょう。